



ふちばら文庫

Neko Yozorano

夜空野ねこ2

イラスト ぽたん味噌

発情
じ〜ずん

（というか、この耳としつぽ。本当に本物なのか？ もしイミテーションなら、外した上ですぐに病院に連れて行ける……）

「……一応、試してみるか」

おそるおそる獣耳に触れて、軽く引つ張ってみる。

「……んきゅっ♪」

その瞬間、ユリイから可愛らしい声が漏れた。

「落ち着け……落ち着け、俺。理性を保て。これはあくまでユリイの為なんだ……」

なんとか気を落ち着けながら、耳を何度か引つ張ってみたが、着脱できる気配はない。

「……念のため、しつぽも……」

「……きやうんっ、きやん……くう〜ん♪」

またしても可愛らしい声。耳の奥をくすぐられるような感覚に、才斗の心はかき乱されそうになった。

「だ、ダメだ……これ以上触ってたら、理性が飛びそうになる。……本当に本物なのか……。漫画やゲームなんかでは獣耳のキャラであるけど、あくまでファンタジーだからなあ……」

「んっ……あ……んんっ……」

「ユリイ……？」

それまで呻いているだけだったユリイが、目を覚ました。でも、まだぼおつとしているみたいで、焦点の合わない目でめつくりと上半身をベッドから起こした。

「大丈夫？ いきなり目の前で倒れるからびつくりしたけど……気分はどう？ のど渇いてたりしてないか？ お腹空いてたら何か作るけど——」

「……………こ……」

「え？」

どうやら、正氣に戻ったわけではないようだった。ユリイはうわ言のように、ぶつぶつと何かを呟いていた。

「おと、こ……おとこのひと……さいとの、におい」

「お、おい、どうしたんだよ。大丈夫か？」

心配そうに傍に寄る才斗に、ようやくユリイの目の焦点が合った。そして——。

「んふふふっ……♪」

背筋に寒気が走るほどに、妖艶な笑みでこちらを見つめる。普段の清楚で控えめなユリイとのギャップに、思わず才斗は絶句してしまった。

「……さいと……さいとっ、欲しい！」

「なっ……うわっ!？」

まるで飼い主に犬が飛びつくように、ユリイは才斗を押し倒した。しかも、上に乗っか

ると、強引にズボンを剥ぎ取ろうとする。

「ちょ、こらっ！ なにをっ……!!」

「おとこっ、さいとっ……♪」

「こ、こら、そりゃあマズイって！ 俺達、恋人でもなんでもないのでこれは……!!」
必死にズボンを死守しようとするも――、

「んふふふっ……♪ めっ♪」

「うおっ えええっ!!」

人間離れた凄まじい力で、はねのけられてしまった。

（なんだ、この力!! とてもじゃないが、女の子のそれじゃない!）

そのまま押さえ込まれてしまうと、あつさりズボンを――同時にパンツまでも、剥ぎ取られてしまう。

「ふふ……チンポ……いい匂い……♪」

「ちょ、こら！ 何を触って――」

「んっ、ふっ……んんっ……」

「ダメだって！ 手を動かすんじゃない……!! つ……くっ、ああっ……!!」
少し乱暴にしがかれて、痛みを覚える。しかし、今まで想像もできなかったようなユリイのエッチな表情と、手のぬくもりにイチモツは大きくなってしまっていた。

「んっ、はあ……あはあ……チンポ……さいとの……チンポ……♪」

「くっ、ううっ……ああ、ダメだ……!!」

必死に止めるのも空しく、肉棒はユリイの手の中でどんどん勃起していく。

その変化にユリイはよだれを垂らさんばかりの笑みを浮かべ、目を輝かせた。

「んっ……はああ……おつきく、なった……においも、すごい……このにおい……好き……大好き……♪ ちゅろっ……」

「え……くっ……お、おお……あぐっ、くっ……ユ、ユリイ……き、君は……」

ユリイはまるで愛しいものを扱うように、いきなり肉棒の先端を舐めてきた。

思わぬ行動と、初めて感じる舌の感触、唾液のぬめり、熱さに、腰が引けてしまう。

「おいひい……このチンポ、おいひいでふ♪」



また、おおきく、なった……んちゅ……さきつぽから、シロップも……ちゅる、ちゅうつ……んあ、はあ……♪ 美味しい、これ美味しい……もつと、飲みたい……んちゅつ……ちゅるつ、ぴちゃ、れろ、ぴちゃ……」

ぐりんぐりと舌を器用に動かして、丹念に先走り汁を集める姿は、とてもエッチで胸が苦しくなるほどだった。それでも、才斗は何とか理性を掻き集めた。

「くっ……ああつ、ユリイ……はあ、はあ……これ以上は、やめるんだ……本当に、一体どうしたんだ？　なんで、俺にこんなことを……」

しかし、才斗の必死の声も届かない。それどころか――。

「んっ、れろ、れりゅ……はあ、ふう……たり、ない。なめるだけじゃ、たりない……もつと、チンポの味……ほしい……食べたい……」

「ユ、ユリイ、何を――ぐっ、くあつ!!」

「あむう、んちゅる……ちゅる、んくっ……んうっ♪」

亀頭から舌を離したかと思うと、迷うことなく口を開いて、一気に肉棒を咥え込んだできたのだ。

「くっ、はあ、あぐっ、ううっ……!!」

熱くてねつとりとした感覚が、肉棒全体を包んでくる。

その心地よさといったら、なかった。

(これが噂に聞くフェラチオか……)

妄想でしか知らなかった行為が、今、目の前で行われている。しかも、それをしているのは、憧れのユリイなのだ。

(そう、ユリイが俺のモノを――)

ようやく頭の中で状況が整理されてくると、今度は大きな興奮が湧き上がってくる。理性が段々と押されてきて、気持ちよさを求める本能が膨れ上がってくる。

「ふうんんっ？　んちゅ……ふわあ……♪ まひや、おおきくなっひや……ドクドクって、なっひえる……んふっ……かわいひ……ちゅるっ、んちゅる、くちゅ……ぴちゃっ♪」

口内で大きくなる肉棒に、ユリイも興奮しているようだ。頭を激しく上下させて口全体で肉棒をしごきながら、舌を縦横無尽に動かして、陰茎、カリ首、亀頭をも刺激してくる。

「ぐっ、っ……あああつ!!」

あまりの気持ちよさに、腰が跳ね上がってしまう。それがユリイの喉奥を突いてしまうことになるのだが、それでも彼女は肉棒から口を離すことはしない。

「んぐっ!!　ううんんっ!　……んふう、ん……ちゅる、れりゅ、ぢゅぷ、ちゅるるっ」

それどころか、そのまま根元近くまで肉棒を飲み込んで、喉の粘膜で亀頭をこしこしと擦りつけてくる。

(うぐっ……す、すごい……やばい、このままじゃ……)

腰の奥が独特な引き攣りを感じ始めて、射精が近いことを告げている。それでも、このまま出してしまおうわけにはいかない。才斗は最後の力を振り絞って、ユリイに訴えた。

「や、やめるんだ、ユリイ……こ、このままじゃ、口の中に出るっ……射精しそうなんだ……頼む。君の口を……俺の精液まみれにしたくない……」

「ちゅぷ、ちゅめる、ちゅめる……ちゅめるっ……んう？　しゃせい……せいえき……ちゅ、んっ……さいとの、せいえき……」

肉棒から口を離して思案顔のユリイ。口元に光る涎が、とてもいやらしい。少し残念な思いもあるが、これでようやく――。

「んちゅっ、のみたい……ぐぐぐ、したい……せいえき……せいえき……んむうんんっ……ちゅめるっ、ちゅ、んちゅる、んっ、はむっ、んんっ……ちゅめるるっ！」
「くっ、があっ！　あううっ……ユ、ユリイ!!」

しかし、今のユリイにとっては完全に逆効果だった。

一秒でも早く精液を味わいたいというかのように、今まで以上に頭を振り、唇をすぼめて、口全体で肉棒に吸い付きながら、口内の粘膜で激しくしごき始めた。

(ダメだ。このままじゃ本当に口の中に……!)

才斗は最後の力を振り絞って腰を引いて、ユリイの口から肉棒を抜き取ろうと試みる。

「んんっ……ぐるるっ……らめっ！」

「あぐっ!!」

「ちゅ、ちゅるるっ、んちゅる、んんっ……ぴちゅる、ちゅちゅちゅっ……!!」

また人間離れた力で腰を押さええられてしまい、動かそうにもビクともしない。

「も、もう、本当にマズイ……ユリイ！　離すんだ、ユリイ！」

「ちゅ、ちゅ、ちゅっ……んちゅっ、んじゅっ、んむうっ、んちゅるるるるるるっ!!」

「……うっ!!　くああああっ!!」

肉棒の根元の根元まで咥えられ、最後は激しく吸い込まれる。

あまりの快楽に意識が飛びかけて、全身に電流を流されたような震えがくる。

「んふうんんっ♪　んくっ、んむううんん！」

んっ……んくっんくっんくうっ♪」



ぷちばら文庫
発情し〜ずん

2011年 11月25日 初版第1刷 発行

■著 者 夜空野ねこ
■イラスト ぼたん味噌
■原 作 アトリエかぐや

発行人：久保田裕
発行元：株式会社パラダイム
〒166-0011
東京都杉並区梅里2-40-19
ワールドビル202
TEL 03-5306-6921

印刷所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを行うことは、
かたくお断りいたします。

落丁・乱丁はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

©NEKO YOZORANO ©2011 KaGuYa

Printed in Japan 2011

PP033